

エーデルマンの自叙伝：敬虔主義から啓蒙主義へ

伊藤，利男

<https://doi.org/10.15017/2332686>

出版情報：文學研究. 77, pp.1-28, 1980-03-31. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：



エーデルマンの自叙伝

—敬虔主義から啓蒙主義へ—

伊 藤 利 男

ゲーテが生れたフランクフルト・アム・マインで、同じく彼が生れた一七四九年に、次の書名をもつ小冊子が発行された。

『ワイセンフェルスに生れ、イエーナで神学を修めたが、しかしそれを放棄して、それに代えてキリスト教と聖書と聖職者を嘲笑した、あの是正されたヨーハン・クリスチアン・エーデルマンの生涯と著作、出生と家族』¹⁾

この小冊子には著者名²⁾の記載はなく、発行年は一七五〇年となっていた。当時官憲の追求を逃れる身であった当のエーデルマンは、この本を北ドイツのハンブルク周辺かあるいはベルリンで手に入れて読んだと思われるが、偽りと中傷にみちた内容を見るまでもなく、彼を刺戟するにはすでにこの書名だけでも十分だった。とりわけ自分の名前に付けられた形容詞「是正された」berichtigtに彼は注意をひかれた。これが「悪名高き」berüchtigtの誤りであることは、彼にもすぐ分ったであろう。しかし彼はさらにこう考えた。

エーデルマンの自叙伝—敬虔主義から啓蒙主義へ—(伊藤)

「彼（非著者）が表紙の、是正された（Berichtigt）という語をお粗末なIをつかつて印刷させたのは、わざとしたのか、それともうっかりしていたからか、あるいは無知からなのか、私には分らない。しかし私が確実に知っていることは、私のことがこれまで十分に報道されて（berichtet）きたこと、したがって私は是正されたといいうか、あるいはもっと率直に言えば、私の生涯の注目すべき状況を、それが真実と一致するかぎりは、悪い評判をたてられたからといって（中略）、恥じる必要がないことを示すために、それを自分から記述する資格を与えられた（berechtigt）ということである」⁴（傍点は筆者）

エーデルマンは一七四九年十一月九日筆をおこして、自分の「生涯のきわめて注目すべき状況」を書き始めた。彼はその小冊子を一節ごとにそのまま再録して、事実と合致する部分は事実として承認し、必要に応じて補足説明をくわえ、事実と合致しない部分は虚偽の記述として指摘して訂正し、さらにその上その小冊子の著者がまったく触れていない事柄についても、注目すべき状況を詳細に記述するというやりかたで、第一部を翌五〇年十二月五日ベルリンで書きおえた。五二年一月三日、彼は第一部と同じやりかたで第二部の執筆にとりかかり、同年十二月二十二日に筆をおいた。未完のまま中断された第三部には執筆開始の日付はないが、これは五三年に書かれたようである。⁵中断の理由は不明である。

当時エーデルマンはベルリンに隠栖していつさいの著作の公表を禁止されていたため、この手記はさし当っては日の目を見ることができなかったが、原稿はなんらかの方法でハンブルクに運びだされて、なんびとかの手で書き写されて、それが同地の市立図書館の所有するところとなった。そして一八四九年、執筆開始後ちょうど一世紀をへて、この手記はハンブルクのC・B・W・クローゼによって右の写本をもとに、若干の注を付して、『ヨーハン・クリスティアン・エーデルマンの自叙伝』⁶という書名でベルリンにおいて出版された。エーデルマン自身の手に成る本文四三九ページに、中断時点から彼の死にいたるまでの経歴の概略一八ページが加えられている。編者クローゼのエ

ーデルマンに対する評価は、あのフランクフルト版伝記の匿名著者のそれと本質的に異なるものではなかった。クローゼは前書きのなかで次のように述べている。「私は、この編集を引きうけることに時としてためらいを感じたことを告白しなければならぬ。一つには、私の名前をエーデルマンの名前と並べることは必ずしも愉快なことには思われなかったし、また一つには、この本がもたらすかも知れない害毒を恐れたからである。」⁷⁾

さらに時代はくだって一九七六年、エーデルマンの自叙伝は、右のクローゼ版が写真複写印刷で再現され、B・ノイマンによる詳細な解説と注釈を付してふたたび出版された。⁸⁾ここではエーデルマンは、もはや悪名高い嘲笑者ではなくて、ドイツ初期啓蒙主義者として、またレッシングの先駆者としての評価を受けて、復活しようとしている。

エーデルマンの名前を私が初めて知ったのは、十七世紀末期から十八世紀後半にいたる期間に書かれたドイツの敬虔主義的自叙伝の成立と展開を調べている過程で、彼の自叙伝に出会ったからである。この自叙伝を敬虔主義的自叙伝の系譜のなかに位置づけ、さらに疾風怒濤期の小説化された自叙伝『アントーン・ライザー』⁹⁾の著者K・Ph・モリッツに対するエーデルマンの先駆的役割を測定しようというのが、私の当初の意図であったが、私は右のベルントの解説を読んだあとも、この意図を変更する必要があると感じなかった。というのも、敬虔主義と啓蒙主義、啓蒙主義とシュトゥルム・ウンター・ドゥラングを、それぞれたがいに真正面から対立する思潮と見るよりも、むしろそれぞれ前者の発展のなかに後者の萌芽を見ることの方が、精神的発展の実際に則しているという私の認識が、ベルントの解説によってさらに裏づけられたと感じたからである。

さて、それでは、その生前悪名高く、死後久しく忘れさられ、そして今ふたたび復活しようとしているエーデルマンとは、いったい何者なのか。まず彼の生涯の概略をしるすと、彼は二六九八年七月九日ザクセンのワイセンフェル

スにエーデルマン家の長子として生れた。父ゴットリープは同地の公爵家に仕える貧しい宮廷音楽士兼小姓教育係であつた。一七一一年公子クリスチアンに随行してザンガーハウゼンへ転動した父とともに一家は同地へ移転し、エーデルマンはその公学校へ四年間通學した。そのあと一七一五年彼は、叔父が首席牧師を勤めているラウバンの町の古典語中学校に入学し、叔父の監督下に生活したが、すでに家庭教師として他の生徒を教えていくばくかの報酬を手に入れることができた。一七一七年ラウバンを去つてアルテンブルクの古典語高等学校に移つたエーデルマンは、かなり自由な生活をたのしみ、卒業後はすぐにも大学に入学したかつたが、經濟的理由からその希望をはたすことができず、さし当つては当時父が住んでいたワイセンフェルスに戻つて、同地の専修学校で学ぶことで満足しなければならなかつた。しかし燃えあがる大学志望を抑えることができない彼は、ある親戚に窮状を訴へ、その仲介によつてアルテンブルクの宗教局から奨學資金を得て、一七二〇年イエーナの大学に入り、母の希望にしたがつて神學を學びはじめた。当時イエーナには、かなりな数の宗教的に目ざめた學生が、ルター派の神學者で敬虔主義に理解をもつ教授ブッデウス¹⁰⁾のもとに集つていたが、エーデルマンも彼を尊敬する學生の一人だつた。しかし大学も含めたイエーナ全体の雰囲気は亂雜放縱で彼の氣に入らず、彼は自叙伝のなかでこの町をソドムとゴモラと呼んでいる。やがて母が世を去り、一七二四年エーデルマンは經濟上の理由からマギステルの學位をとることを断念して大學を去り、当時アイゼナハに住んでいた父のもとへ歸つた。

一七二五年彼は友人の世話で家庭教師の職を得てオーストリアに赴いた。最初に勤めた田舎のコンツァイル伯爵家では、きめられた授業の時間外には狩獵をしたり、近在各地のカトリック修道院を訪れるなどして、彼は最大限の自由な生活をたのしむことができたが、三年後には田舎くらしのため自分の學問が停滯することを恐れて、首府ウィーンの富裕な商人ミュールの家へ移つた。しかしハレ派敬虔主義を信奉するこの一家に彼が見出したものは、結局のところ極端な¹¹⁾、信心でしかなかつた。とりわけ自己神聖視するミュール夫人の嚴格主義に自分の自由が圧迫される

のを感じたエーデルマンは、半年ほど勤めただけでミュール家を去り、ふたたび田舎へ戻って、コルンファイル家の親戚にあたるアウエルスペルク伯爵家に家庭教師として住みこんだ。

しかし彼の本来の志望はドイツで牧師の職につくことだった。オーストリアに滞在することすでに合計六年となったエーデルマンは、機会を得てザクセンへ帰ったが、しかし目ざす牧師の職を見出すことができず、生活費を得るためにやむなくふたたび家庭教師の職につくことになった。初めに勤めたのは、フライベルク近郊の正統ルター派の牧師の家であったが、ここで読んだ急進的敬虔主義者ゴットフリート・アルノルトの『教会と異端者たちの歴史』¹¹⁾は、彼のその後の思想上ならびに生活上の遍歴に方向を与えることになる。やがてある貴族の家庭教師として首府ドレーズデンに移ったエーデルマンは、授業のかたわら著作活動にとりかかり、一七三五年『潔白な真理』¹²⁾第一部を出版したが、これはドレーズデンの宗教局が彼に疑惑の目をむける機縁となった。また彼は、同胞教団の創立者として名声高い敬虔主義者ツィンツェンドルフ伯爵¹³⁾をヘルンフートに訪ねてしばらく滞在したが、しかしそこに見出したものは、彼の理想を満足させてくれるような救世主像からほど遠い小專制君主の姿でしかなかった。

一七三六年エーデルマンは、ウィトゲンシュタイン伯爵領のベルレブルクに赴いた。伯爵カジミルの宗教的寛容政策によってあらゆる種類の教会離脱者たちが集まってきて住みついたベルレブルクでは、J・F・ハウクを中心にして、いわゆる『ベルレブルク聖書』の編集事業が進められていて、エーデルマンは、『潔白な真理』¹⁴⁾出版を通じて文通するようになったフランクフルトの教会離脱主義者アンドレーアス・グロース¹⁵⁾の仲介で、それへの参加を求められたからである。しかしハウクとの友好関係は永續しなかった。その理由の一つは、ハウクが彼に約束した報酬を支払わなかったからであるが、より根本的な原因は二人の宗教上の考えかたの相違であった。エーデルマンが執筆した『テモテへの手紙・上下』その他の項目は、断わりなしに大修正されて、印刷されたときにはまったく別物になっていた。彼はハウクと袂をわかった。

それよりさきエーデルマンは、いわゆる神靈感応者たちの一団に接近していた。これはベルレブルク同様に教会離脱者たちの集合地であったウェッテラウに本拠を置き、J・F・ロックを予言者¹⁶⁾として崇拜する異端の一派であるが、ベルレブルク在住のこの派の人々の祈禱集会に出席するようになったエーデルマンは、ここでも神の真理を見出すことができず、むしろロックの予言なるものに一種の宗教的い、か、さ、まを見ざるをえなかった。一派の人々もエーデルマンに不審の眼をむけ、両者の関係は險悪になってきた。まだ宗教的確信をもたないエーデルマンは非常に大きな不安にとらえられた。そういう悩みのうちに、ある日突然彼の心にギリシャ語で、『ヨハネによる福音書』第一章の「神ハろぐすデアッタ」という言葉が聞えてきて、彼にはそれははっきりと、「神は理性である」と言っているようにしか思われなかった。彼は、これこそ真理であると確信した。この開悟に力をえたエーデルマンは、ほどなくロック及びその側近たちと対決して——といっても、それははなばなしい論戦ではなくて、ロックの脅迫をまじえた言辭を平然と聞き流すだけのことだった——勝利をおさめ、神靈感応者たちの集団から自発的に脱退した。

この集団のなからエーデルマンに心服する男女各一名が彼と行動をとにした。彼ははその二人と同じ家に住んでいたが、経済的に困窮し、ささべり造りの職人の徒弟になってようやく食いつないだ。しかし、それは精神面では充実した敬虔な生活だった。彼は『潔白な真理』の執筆を継続して十三部まで書き、啓示宗教の非合理性をはげしく攻撃した。彼がこういう苦しい生活を送る一方で、ドイツの各地に彼の著書を読んで彼に共鳴し崇拜する人びとが現われてきた。この友人たちは彼に生活費や出版資金を送ってきたので、彼はささべり職人をやめて著作に専念することができ、また印税の収入もふえて、いわば職業著述家として自立することができた。このころ、彼はバルリーンの友人から送ってもらったスピノザ全集を熟読し、そして一七四〇年には、彼の最も重要な著作と見なされる『素顔のモーゼ』¹⁷⁾を出版した。

一七四一年、ウィトゲンシュタイン家では伯爵カジミルが死んでその子フェルディナントが新しく当主になると、

領内に住む教会離脱者たちにも重い税金が課されることになった。これを嫌ったエーデルマンは周到な準備をととのえたのち、ある夜半すぎ家財・書籍を積んで百姓たちが索く複数の荷車をしたがえてベルレブルクを脱出し、まえもって自分から赴いて、領主の伯爵から居住許可をとっておいたハッヘンブルクにむかつて初冬の悪路を進んだ。しかしハッヘンブルクにもすでに彼のキリスト教嘲笑者としての悪名は聞えていた。カトリック、ルター派、改革派の僧侶たちは、うちそろって伯爵を訪れて、エーデルマンの追放を要請したが、居あわせた伯爵夫人の熱心な弁護により、この要請は却下され、彼はまずまず平穩にくらすことができた。その間にはベルレブルク時代同じ家に住んでいた彼の二人の崇拜者がやはりハッヘンブルクへ移ってきて、ふたたび同居生活が始まったが、しかしこの地も結局のところエーデルマンにとって安住の地ではなかった。というのは、彼らが借りていた家が売却され、彼らは立退きを迫られて、二人の同居人は町のなかに何とか自分たちの住居を見出したものの、エーデルマン自身はどこにも適当な部屋を見つけることができなかったからである。

ふたたび新たな寄留地をさがす彼の目に恰好の場所と映ったのは、一六三五年ウィートの伯爵の寛容令によってあらゆる異端の宗派の人々が住みついて作られた、ライン河畔の町ノイウィートであった。一七四四年、エーデルマンは伯爵に居住許可を請い、町の状況をあらかじめ検分するため、自分から同地へ旅行したのち、ハッヘンブルクをひき払ってこの町へ移住してきた（この時点で自叙伝は中断する）。

それ以後のエーデルマンの足跡は、おおよそ次のごとくである。ノイウィートの宗教局はエーデルマンに信仰告白を文書にして提出することを要求し、彼は初めはそれを拒否したが、しかし結局、宗教局も彼自身もそれを公表しないことを条件にして、彼は一七四五年九月信仰告白書を当局に提出した。ところが、やがてその文章の写しがかこかしこで歪曲されて市中に出回ったので、彼はこれをもとの文章に戻し、詳細な注釈をつけて公表することが必要であると考えた。これが翌四六年発表された『書くことを強要されたが他人にはまた読むことを強制しない信仰告白』¹⁸⁾で

ある。しかし、この『信仰告白』は『素顔のモーゼ』とともに神を冒瀆する書物として発禁・押収処分を受けたので、著者として自分が帝国検事局から訴追されることを恐れたエーデルマンは、その年のうちにノイウィートをひそかに退去した。ちなみに、押収処分を受けた著書は、一七五〇年ようやく下された判決によってフランクフルトにおいて公開の場でおごそかに焚書され、同時にその著者は官憲が捜索中の人物であるという宣告を受けた。

ノイウィートを去ったあとの彼の足どりには、不明の部分が多いが、彼の進路はまず北へむかい、彼は各地の友人や崇拜者たちのもとにしばらくの滞在をかさねたのち、当時デンマークの支配下にあつて信教の自由が許されていたアルトナ（現在はハンブルクに含まれる）に到着して、とりあえずここに腰をおちつけたもようである。四七年にはそのころブラウンシュヴァイクで発表された彼への攻撃文に対する反論『聖ハーレンブルクの福音』¹⁹⁾を出版している。同じ四七年、エーデルマンは招かれてベルリンに赴き同地の友人の家に滞在し、新しい友人をつくったり、文筆活動を行なったりしたが、しかし四八年かあるいは四九年になってふたたびハンブルク、またはその周辺地に姿を現わし、さらに同じ四九年のうちにまたしてもベルリンに舞い戻った。キリスト教の嘲笑者としてエーデルマンを非難攻撃する声はますます高くなっていたが、プロイセン国王フリードリヒ二世（大王）は彼に居住の自由を与えた。彼は、同じ考えをもつ友人たちと交際し、出版を禁止されていたものの、『素顔のモーゼ』の続篇や自叙伝の執筆を続けた。一七六七年、彼は卒中のためベルリンで没したが、それを報ずる新聞は、死亡日を二月三日とするものと二月十五日とするものの二つに分れた。

以上のように私はヨーハン・クリスチアン・エーデルマンの略伝をえがいてみたが、もし彼の人生を一言でもって要約するならば、それは真理を求めて遍歴する求道者の生涯であつた、と行うことができよう。それは敬虔主義から出発し、いくつかの異端の宗教をめぐって最後に啓蒙主義者となる遍歴であつた。

いま私が、それは敬虔主義から出発し、と書いたのは、エーデルマンの思想的遍歴は敬虔主義とのかかわりあいから始まった、という意味であって、彼が敬虔主義であったというのではない。というのも、敬虔主義者になるということは、敬虔主義の神学理論に即していえば、人間が俗世の子から信仰によって再生し神の子になる、ということであって、もしその人間の生涯のうちにこの再生の過程が認められなければ、彼がどんなに敬虔にふるまったにしても、彼を敬虔主義者と呼ぶことができないからである。その意味でエーデルマンは敬虔主義者ではなかったが、敬虔主義との接触が彼に与えた影響は重大だった、と言わなくてはならない。

彼が敬虔主義に初めて関心をもったのは、イエーナの学生時代のことと考えられる。それ以前の彼の宗教的関心ないしは行動について、自叙伝にはごくわずかな記述しかないが、そのかぎりでは推測すると、幼少年時代を通じて彼はとくに信仰上の疑惑をもつこともなく、神学を修めて正統ルター派教会の牧師になることを、人生の目標としていたと見られる。そのような彼の単純な正統信仰が、敬虔主義に好意的なブッデウスの講義を聴いて大いに揺さぶられたであろうことは、想像にかたくない。ブッデウスのこの方面における影響力は、エーデルマンとはほぼ同時期に同じ大学で法律学を学んでいた、のちのヘルンフト同胞教団の大幹部シュパンゲンベルクが、²⁰⁾ たまたま彼の講義を聴いて深い感動をうけ、神学に転じて、ほどなく敬虔主義者になったことから証明されよう。エーデルマンもブッデウスの影響をまぬかれなかった。彼は教授たちのうちでは特にブッデウスとその女婿ワルヒを尊敬し、「まもなく熱心なブッデウス派というか、あるいはいわゆる敬虔ぶる人になった」²¹⁾のである。この「敬虔ぶる人」という言葉には自嘲の響きがあるが、いずれにせよ彼は敬虔主義への好意をブッデウスによって植えつけられたことは確かである。彼の自叙伝が次に敬虔主義とのをわりあいについて言及するのは、彼がウィーンで家庭教師をつとめたミュール家の事情を説明するくだりである。そこで彼はミュール夫妻の狂信ぶりを述べる際に「私のそのころの敬虔主義に対する好意にもかかわらず」²²⁾と書いている。現実に見る敬虔主義者ミュール夫妻の信仰の様態は、彼の目には反理性的な迷信

ないしは、え、信心としか映らず、彼はそれに激しい嫌悪を感じざるをえなかったものの、しかしそれは彼の敬虔主義への好意に影響を与えなかったと見なくてはならない。

敬虔主義への好意とは、裏返していえば正統信仰への反感にはかならない。エーデルマンの敬虔主義への傾向は、彼がドイツへ帰ってからいっそう強まることになる。フライベルク近郊でふたたび家庭教師としてルター派牧師の家に勤めた彼は、その教区を所管するフライベルク地方監督がたまたま彼のアルテンブルク時代の恩師であることを知って、この回りあわせを「神の特別の導き」²³⁾と考えて、熱心に読書と勉強にはげんだが、それを見て固くな正統主義者のその牧師は、彼に「敬虔主義の疑いをかけた」²⁴⁾というのである。当時を回想して彼は、「けれども私は偽善者だった」²⁴⁾といい、さらに「私は聖者のように、再生した者のようによそおっていたのだ」²⁴⁾と告白している。しかし、敬虔主義の神学理論の根幹をなす再生については、彼はそこに論理的な矛盾を見出し、心のうちには疑惑がつのるばかりであったという。「私は人びとがいわゆる無神論者、自然主義者、理神論者、自由信仰主義者などについて話すのを聞いただけで、体がふるえた。私には、自分の疑惑をうちあげたならば、それととり除いて私を安心させてくれるような、信頼をおける人がだれもいなかった」²⁵⁾。こうした状況のなかで彼が出会ったのが、アルノルトの『教会と異端者たちの歴史』である。後年フランクフルトの生家で病後を養なう二十歳のゲーテに、「これまで狂気かそれとも背神として教えられてきた多くの異端者についてもっと好意的な観念」²⁶⁾を与え、彼が汎神論的世界観を形成する一つの機縁となったこの書物のなかに、それより三十数年まえザクセンの田舎で三十歳すぎの家庭教師が最大の驚きをもって見出したものは、「キリスト教の本当の趣旨を説くのは自分たちだけで、と自慢している聖職者のがわのあまりにも夥しい没義道と無責任だった。それで私（フエーデルマン）はいわゆる正統信仰が本当に嫌いになり、ますますもって、いわゆる敬虔主義者たちのがわに惹かれ始めた。なぜなら敬虔主義者たちは、たしかに彼らなりの欠陥をもっている、見うけるところ、正統派の人びとよりもずっと、敬神の生活を送るよう人びとを励ましているようだ

ったからである」²⁷⁾ このように、正統派への反感がいつそう強まって、彼は批判勢力としての敬虔主義にますます惹きつけられていったのである。

ドレーズデンへ移ったエーデルマンは、給料の大部分をいわゆる異端書ないしは発禁書の購読にあてて、正統信仰からますます離反していった。彼は自叙伝のなかで、当時の自分の宗派性を次のように分析している。「一言でいえば、私はまだ四分の三以上はルター派であったが、ただ違う点は、この宗派内で正統主義者のがわよりも、敬虔主義者となかば教会離脱主義者である人びとのがわに、より多く傾斜していた」²⁸⁾ また宗教生活については次のように報告している、「私は祈った、私は断食した、私は告解した、私は聖餐を受けた、私は一つの教会を出るとまた次の教会へはいった。要するに私のドレーズデン滞在の最初の半年間、真に厳格な教会キリスト教徒に要求されるかぎりのあらゆることを行なったのである」²⁹⁾ 彼は、「本当に正しいキリスト教徒になりたい」という意図から、原始キリスト教徒たちと同じようにふるまう人びとを懸命にさがし求めたが、しかしそれらしい人をだれ一人見出すことができなかった。そうした折に彼の耳にはいつてきたのが、ヘルンフトに同胞教団を創設したツィンツェンドルフ伯爵とそのいわゆる自己否定についてのすばらしい評判である。彼は伯爵に手紙を書いて招待を受け、ヘルンフトに赴いたが、その実状を見て失望し、そしてそれ以後、教会離脱主義者、神靈感応者などの異端の宗派に真理を求めて遍歴する人生が始まるのである。

エーデルマンの宗教的・思想的遍歴の出発点は、敬虔主義であった。しかし彼と同じ時代、同じように若くして敬虔主義と接触した宗教人、知識人が無数にあったなかで、彼の生きかたはきわめて稀な例外である。大多数は敬虔主義者となって一生をすごすか、あるいは正統信仰に立ち戻るか、あるいはまた異端の宗派に身を投じてそこからふたたび脱出することなく生涯を終っている。たしかに敬虔主義は時代の一傾向としてエーデルマンの思想遍歴への出発

点とはなったが、しかし彼の人生は、彼があらゆる種類の敬虔主義と絶縁することによって、精神的意味で大きく飛躍前進したのである。とするならば、彼を敬虔主義に固着させることなく、彼の人生を飛躍させるような何らかの動因が、彼の敬虔主義との接触以前に、どこかに潜んでいたにちがいない。それはいったい何か、またどのようにして出来たものであろうか。この秘密を解明する手がかりを与えてくれるのが、自叙伝である。

エーデルマンの自叙伝は、たいていの敬虔主義者の自叙伝と同じように、誕生、洗礼、両親の紹介、幼時教育など順次記述していくが、しかしそれを記述する姿勢は敬虔主義者たちのそれとは著しく異なっている。一例として洗礼の項を訳出してみる。

「・・・私は生れてまもなく洗礼を受けて、そして醜い悪魔が通常の儀式によって情容赦なく私のなかから追いだされた。悪魔が表戸から逃げたのか、それとも裏戸から逃げたのか、私には分らない。いや、そのとき実際に悪魔抜い師の命令におとなしく従ったのかどうか、私は何びとにも確かめることは保証できないが、いずれにせよ私の両親は、悪魔が本当に出ていった、と固く信じていた。しかし私は、私のなかに悪魔などそもそもいなかったこと、また今でも人びとが無垢な子供たちのなかから懸命になって悪魔を追いだそうと苦勞することお芝居のすべては、こっけいなペテン劇であるということを、確かに聞き知っている」³⁰⁾

教会の牧師を悪魔抜い師と見立て、洗礼をペテン劇とする見かたは、言うまでもなく自叙伝を執筆する現在のエーデルマンの合理主義に由来するものであって幼年時代の彼は、両親から自分の洗礼の模様を聞かされて、自分のなかから悪魔が追いだされたと信じていたにちがいない。この洗礼の例が示すように、過去を回想するエーデルマンは、特に宗教上の事柄を叙述する場合には、しばしば自分のその当時の考えかたを現在のものの見かたによって蔽いかくするのである。

しかし、いずれにせよ誕生直後の洗礼が彼自身の記憶にとどめられているはずはない。それに対して、続いて語ら

れる次の体験は、彼の記憶に残っているものと見なされる。彼はこう述べている。

「しかし私は両親から、とりわけ旧姓をハーバーラントといった母のドロテーア・マグダレーナと、その母の当時まだ存命していた母、つまり旧姓をブラウンといった祖母のゾフィーから、本当にやさしく愛されていた。やさしい母は私に八か月のあいだ滋養分として乳を与えてくれ、その期間がすぎると私は乳離れし、そして神が私に授けて下さった、生気にあふれたりっぱな姿かたちによって、私の両親の楽しみと喜びとなった」³⁰⁾

この回想にはエーデルマンの現在のものの見かたは混っていないと見ていいだろう。乳離れの記憶は、あとから母親から聞かされてふたたび記憶に残ったものであろうが、幼いエーデルマンが家族から、とりわけ母親からやさしく愛されていたという記憶と、もう一つ自分がりっぱな容姿によって両親を楽しませ喜ばせたという記憶は、彼自身のものであろう。さて、これは一読して何の変哲もない幼年期の思い出のように見えるが、しかしこのなかには自叙伝研究にとってきわめて重要な要素が含まれている。精神分析の創始者フロイトは、一九一七年に発表した『「詩と真実」中の幼年時代のある思い出』において、ゲーテが自叙伝の最初に語ったいわゆる「陶器こわしの悪戯」の動機を分析して、結論としてゲーテの人生の秘密を次のように解釈した。「母親の疑う余地もないとし子であった者は、生涯にわたって勝利者の感情、成功への確信をもちつづけるものであり、そしてそれが実際に成功をもたらすことは稀でない。だからゲーテは自叙伝の冒頭に、『私の強さは私の母に対する関係のうちに根ざしている』³¹⁾というたぐいの言葉を、当然書いてよかっただろう」³¹⁾ゲーテ自身は、自分の人生が成功であったなどと言われることを嫌っていたが、しかし彼の強さが「母に対する関係に根ざしている」というフロイトの見かたには、おおむね異議がないだろう。ゲーテとは対照的に、一七三八年に自叙伝を出版したアーダム・ベルントは、³²⁾いわば挫折の人生を送った元牧師であるが、彼の「母に対する関係」をさぐってみると、彼が幼年期に母親の憎まれ子であったことが発見される。この関連をフロイト流に解釈すれば、ベルントは母親の憎まれ子であったがゆえに、生涯にわたって挫折者の感

情、成功への疑惑をもちつづけ、そしてそれが現実に挫折をもたらしだ、ということができよう。

さて、エーデルマンの人生は世間的な意味では成功とは決して言えないが、しかし彼には挫折者の感情というようなものは、いささかも見当らない。いや、むしろ、あらゆる非難、中傷、攻撃、弾圧にも屈せず、困難や苦境を巧みに切りぬけて前進しようとする気概にあふれている。もし彼が、二十年なり三十年なり後の世に生れていたら世間的な意味でも彼の成功はまちがいにあったであろう。このような彼の人生態度の基礎は、「母に対する関係」のうちに、つまり彼が母親のいとし子であったことによって、また、両親から享けたりつばな容姿に対する誇らかな感情によって培養されたと言っても、あながち過言ではなからう。

エーデルマンの幼少年時代のその後の体験として自叙伝で語られている思い出は、それほど多くはないが、その大部分はラテン語学習と教師についての叙述である。そのなかで注目されるのは、彼が弟といっしょに個人教授をうけたウェルニッケという厳格な教師に関するもので、彼は次のように書いています。

「この児童虐待者は、もし私たちがもっと長いあいだ彼の笞のもとに留まらなくてはならなかったならば、私たち二人をついにはまったくの勉強嫌いにしてしまい、そして私たちは一番たのしめるべき歳月をこのような怪物のもとで送りつづけるよりも、いっそのこと両親にたのんで靴屋か仕立屋の職人にしてもらおうと決心したことであろう。しかし慈悲深い神の先慮は、私たち二人に関して別の決定をくだしたまい、私たちは一七一一年、両親がザンガーハウゼンへ移転したとき、この獄吏から解放され、ザンガーハウゼン到着後はどなく町の公学校へ入れられた」³³⁾

きびしすぎる教師に対する少年の、生涯忘れることのできない憎しみは、この時代の自叙伝にはしばしば見られるものであって、たとえばヴェルテムベルク派敬虔主義の代表的神学者エーティンガーは、そのような教師に対して、「毒をもって仕返しすることもできたかも知れない」³⁴⁾ほどの激しい敵意をいだいたことを告白している。エーデルマ

シンの憎悪は、それほど真正面からの過激なものではない。彼は、できることなら教師の咎のもともとから脱出して、他に自分の行く道を見つけたしたいと願ったのである。彼が後年何らかの困難な現実に遭遇した場合、それを除去してしまふまで徹底的に戦かおうとするのではなくて、そこから脱出して他に生きる道を求めていったやりかたの、いわば原型がこの願望のなかに見出されるのである。

右に引用した記述でもう一つ注意しなければならないのは、「慈悲深い神の先慮」という言葉である。敬虔主義者たちは、人間の歩みは神の先慮によって正しい目標に導かれると信じていた。したがって彼らの自叙伝では何か一身上に変化がおこった際、その原因を「先慮によって」という言葉で好んで言いあらわした。今日の言語感覚からすれば、「たまたま」と言うべきところで、しばしば「先慮によって」という表現が用いられるのである。右に引用したエーデルマンの場合も、一家が移転して、したがって彼が教師の咎を逃れることができたのは、たまたま父が転勤したというまったく世俗的な理由からにすぎない。彼の自叙伝中には、このほかにもかなり頻繁に「先慮」という語があらわれる。たとえばイーナで学生生活を始めたばかりのエーデルマンは、持参した僅かばかりの金を本の購入にあててしまうなどして、経済的に困窮していたが、たまたま知人からたのまれて一人の学生を自分の部屋に同居させてやることによって、下宿料が半分ですむことになった。そこで、「慈悲深い先慮はこのたびは私にそう長いこと思わすらずにわせた³⁴⁾しなかった」ということになるのである。このような「先慮」の頻用は、すでに敬虔主義を批判する立場にあるエーデルマンが、人生に起こる諸事象の因果関係を考えるとき、今なお敬虔主義者と同じような先慮信仰に支配されていることを示していると言えよう。ただ一つ区別しなければならないことは、その先慮が由来するところの神がそれぞれで異なる点である。敬虔主義者の神はキリスト教の神であり、エーデルマンの神は理性である。

敬虔主義者たちの自叙伝を読みなれた者にとって、エーデルマンの自叙伝の目新しさは、キリスト教およびその教

会に対する辛辣な批判のほかに、経済生活に係る詳細かつ卒直な叙述である。右にあげたイエーナで自宅に同居人を置いたという記述も、すでにその一例であるが、一番先に書かれている例は、彼がラウバンの古典語中学校生徒であった十七歳ころのもので、当時この学校では生徒たちのあいだに詩を作ることが流行していて、それに刺戟されたエーデルマンは大いに作詩の腕をみがいた結果、級友のなかの貴族の子弟のために詩を作ってやって、その報酬として二、三グロッシェンの金を手に入れることができたまでになった。以下、直接引用すると、

「私はその当時親類の家ですべて無料でまかなって貰っていたので、実家からは無に等しいほどの金しか送ってもらっていなかったが、その金が詩を作ることによって手にはいることが分ったので、私はいっそう作詩に身をいれ、そして一つの主題を時には五通りから六通りもの詩に仕立てあげたものである。しかし、それにもかかわらず私は詩人になることはできなかった。けれども私は今日にいたるまで詩と、詩の魂である音楽を愛しているし、昔は音楽ではピアノとフルートをつたなからず奏したものだ」³⁵⁾

この回想の主題は明らかに作詩であって、経済生活は副次的に語られているにすぎないが、しかし「金が詩を作ることによって手にはいることが分った」ということは、エーデルマンの将来にとって意味深い体験である。というのは、後年の職業著述家——ノイマンによればドイツで最初の職業著述家——エーデルマンは、このとき初めて、自分が書いたものが金になるということを知ったからである。ラウバン時代の彼はさらにひとに頼まれて家庭教師をしたり、自分よりも年長の貴族の青年の復習教師をして若干の収入を得ることができた。このような仕事について彼は次のように回想する。「これらの家庭教師の仕事は、私の勤勉にますます拍車をかけたばかりでなく、三か月ごとに私に数グルデンをもたらし、さらに級友たちのあいだで私は大きな信用を博するにいたった」³⁶⁾

青少年期のエーデルマンにとって、右に紹介したような金儲けの話よりも遙かに重要なのは、貧乏の体験である。すでにラウバン時代、彼は叔父の家で、年長の粗暴な若者を同室者にもっていたが、ちょっとした静いからこの男に

顔をひどく殴られるという事件があった。彼はこの一件を叔父に訴えて、少くともその男から謝罪を勝ちとろうとしたが、逆に叔父から、年少の者は年長者に譲歩すべきだ、とたしなめられた。相手は彼をますます見くびって嘲笑したが、「しかし私（＝エーデルマン）は叔父から扶養されている身であるがゆえに（中略）、その苦痛をかみ殺した」³⁷⁾のである。エーデルマン家の貧乏の原因は、公爵家に仕える父親が何かの理由で長年にわたって給料を払ってもらえなかったからである。エーデルマンはアルテンブルクの古典語高等中学校を卒業したものの、さし当って大学進学を断念し、ワイセンフェルスの専修学校で我慢しなければならなかった。そのときの気持を彼は次のように述懐する。

「私がこれまで大学を目ざして重ねてきた努力と熱意のすべては、それがまさに花開くか開かないかのときに、ふたたび窒息してしまいそうな傾勢となった。私は何千回となくこう思った。自分は両親からいまいましい学問に献上されるよりも、まともな手職を習わせてもらった方がよかった、自分はまもなく二十二歳にもなろうとする若者だが、ときには無理難題という親方のもとで徒弟奉公することだって、恥ずかしくない」³⁸⁾

彼は貧乏がもたらす悲喜劇をいくつか実に写實的にえがいているので、その一例をここに紹介すると、ワイセンフェルスの専修学校時代、彼はたった一着しかない服をだいに着ていたが、ある日級友にうしろからインクをふりかけられて、その服に大きなしみがついてしまった。彼は、こんな場合衣服についたしみをレモンの汁できれいに拭きとることができるということを見聞していたので、さっそくこの方法を応用してみたところ、インクのしみはもっと大きな黄色のしみに変化して、その服はもう人前に着てでることができないしろものになってしまい、彼はすっかりふさぎの虫にとりつかれてしまった、というのである。

さて、そこで注目すべきことは、エーデルマンが貧乏をどのように受けとめているか、という問題である。その点について次のような感想が見出される。

「神の先慮がワイセンフェルスとそのあとイエーナで、私にこうも窮屈な苦しい生活をさせたもうたのは何故

か、ということをよくよく考えてみると、先慮がそうすることによって私を愛欲におはれることから守ろうとしたもうたからだ、という以外には何の理由もまず見出すことができない。さもなければ（『貧乏でなかったならば』）、もしも私に、ジュピターがレダにしたように、黄金色の雨を注ぎかけることができるような愛欲の対象が現われたならば、私はきっと愛欲におぼれてしまったにちがいないだろう³⁹⁾」

貧乏もまた神の先慮である、とエーデルマンは考えるのである。そして、先慮が彼を愛欲におはれることから守ってくれたという考えかたは、つまりは彼の禁欲主義を証明するものであろう。禁欲主義もまた敬虔主義の生活訓の一つであるが、しかしそれは物欲、金銭欲、立身出世欲というような世俗的欲望に関する禁欲を要求するのであって、キリスト教徒にふさわしい結婚を禁止するものではない。エーデルマンは終生独身であったが、しかし彼にも恋愛体験はあった。イエーナ時代の終り近く、彼は当時両親が住んでいたアイゼナハに重病の母を見舞うべく旅行したが、その途中立ちよったゴータの親戚の家で、初めて会ったこの家の娘を心憎からず思った。彼は次のように告白する。

「私はもしその時、礼儀正しいやりかたで愛にところを得させることができたならば、彼女とずっと打ちとけて話をしたのであることを否定しない。しかしこのたびは、愛は理性に屈服しなければならなかった⁴⁰⁾」そして、「私の創造主のやさしいお導きによって、アイゼナハからの帰り道、ゴータで愛する人との再会をたのしむ⁴⁰⁾」ことができた彼は、彼女と前回よりも親しく口をきいたけれども、二人の仲は、彼自身の言うところによれば、周囲のひとの妨害によって、たがいに愛の言葉をかわすなどの事態にまでは進展しなかった。そこで彼は、「愛する母が死とたたかっているときに、私が官能的な喜びを味わうなどということは、たぶん天の神のお気にめさなかったのであろう⁴¹⁾」と考えるのである。右の例に見られるエーデルマンの愛についての考えかたには、たしかに敬虔主義的な禁欲主義の影響が明らかであるが、しかし愛についてのこのような率直な告白は、本来の敬虔主義者たちの自叙伝にはほとんど見られないものである。

ここであたたび觀察をエーデルマンの經濟生活に戻すと、彼が家庭教師となつてオーストリアに赴いたのは、「世の中を少しばかり見てまわりたいという氣持」⁴²⁾に促がされたのと同時に、また生活上の必要に迫られたからである。赴任に際して彼は、旅費の工面にまたしても苦勞しなければならなかったが、そういう苦勞を通じて彼が世の中を經濟的側面から觀察する眼を養ふたであらうことは想像にかたくない。略伝でも触れたように、彼はオーストリアでは近辺のカトリック修道院をいくつか訪問したが、その際その修道院の經濟について、修道院領からあがるぶどう酒その他の農産物による年収を見積つて、その豊かさに驚いているのも、彼がすでに經濟学的な視線をもつていた証拠であらう。このような經濟学的視線は、ベルレブルク時代以後、彼が独立した職業著作家として生活をいとなんでいく上に、大いに役だつことになるのである。經濟学的な視線とは、つまりは一つの合理主義にはかならない。彼が新しく課せられることになった税金を嫌つて、ベルレブルクを夜逃げしたのも、まさにこの合理主義的な計算の当然の歸結と見ることができよう。

貧乏ゆえに養なわれた合理主義あるいは現實主義は、社會を見る眼にも波及してくる。オーストリアへの赴任の旅は、エーデルマンに実にさまざまな體驗見聞をもたらしたが、その一例を紹介すると、彼が乗った乗合馬車がバンベルクの町へ入るときと出るとき、五十人ほどの乞食の群にとりかこまれて前進できなくなり、乗客はみな持ちあわせた小錢をぜんぶこの哀れな人びとに分け与えて、やっと馬車は通過することができた。そこで彼は言う。「その一方では、教会のなかの死んだ聖者たち（＝聖者像）は金や銀をびかびか着飾り、その奉仕者（＝僧侶）たちはぜいたく三昧にくらしているのだ」⁴³⁾。このような社會あるいは教会への批判は、ほかにもこの旅行とオーストリア滞在の叙述にしばしば見られるが、もう一つ注目すべきは、自然の世界に対するエーデルマンのかかわりあいである。

オーストリアへの道程にはドーナウ川をくだる船旅が含まれていたが、エーデルマンはそれを次のように描写する。

エーデルマンの自叙伝―敬虔主義から啓蒙主義へ―（伊藤）

「船旅そのものは、はなはだ快適だった。というのも、それは一年で最も美しい季節、つまり復活祭と聖霊降臨祭にはさまれた時期であったということのほか、川の両岸に現われてくる気持よい風景と、いわば刻一刻移りかわる町や村、修道院、城館、山、畑、森、牧場、草原、藪の新しい景観が、眺める眼に絶えまなく限りない快適な楽しみを与えてくれるからであった。

故郷の本当にやっぱり美しい景色のほかには、このように多くの自然の美がいちどきに現われて、千変万化うつり変わるのをまだ見たことのなかった私は、このすばらしい機会を利用して、船室のなかで他の人びとといっしょに坐っているように言われていたにもかかわらず、いつも甲板に出て腰をおろしていた⁴⁴⁾」

このように自然の美を心ゆくまで楽しむという情景もまた、ひたすら自己の内部に觀察の眼をむける敬虔主義者たちの自叙伝には、ほとんど見られないものである。それでは、その自然とはエーデルマンにとって何を意味するのか。彼は次のように書いている、「私はこう言うことができる、自分はこの船のうえで、神のこのすばらしい作品をいささかの感動をもって眺めた、恐らくただ一人の人間であっただろうと」⁴⁵⁾

自然を神の作品と観る彼の見かたは、ブロッケスの『神による地上の楽しみ』⁴⁶⁾に大きく影響されている。彼は船に乗るまえにすでに旅の道づれとなったある紳士からブロッケスのこの詩集のことを聞かされていたので、オーストリアに着いてから、この詩集を買って熱心に読んだというが、六年間のオーストリア滞在をおえてザクセンへ帰る旅の途中、やはりドーナウ川の船上でふたたび自然の美に深い感動を味わった。彼はこのたびは旅費を節約するために、ドイツへ移住することになったコルンファール伯爵家の傭い船に便乗したのであるが、その船上で体験した自然の美しさを神の啓示と見て、次のように述べている。

「少なくとも、神のこのようなすばらしい啓示は、月曜日ごとに伯爵の船で行なわれたいわゆる礼拝で、古い信仰書のなかから読んで聞かされた、旧約あるいは新約聖書のいわゆる啓示についてしかじかの説教師たちが語っ

たとかいう夢物語なんぞよりも、はるかに大きな感動を私に与えてくれた。もっとも私はそれと同時にまだ、そういう種類の神の啓示に対しても尊敬を払っていた。とは言っても、私が熱心に読んだ『神による地上の楽しみ』のなかでブロックス氏が、自然という神のすばらしい、何の歪曲もうけていない啓示をうたった二、三の詩句から、すでに私の心はたいへん深い印象を与えられていたので、自然は、私が今やと理解できるよりもずっと多くのことを、私に言おうとしているのだ、と私は感ずることができた⁴⁷⁾」

このような、自然のなかに神の啓示を見ようとするエーデルマンの自然観は、三十歳前後の彼においてはまだまだ未熟ではあったにせよ、神の啓示をひたすら聖書のなかに求める他の敬虔主義者から彼を区別する目印と言っている。

以上、私はエーデルマンの三十歳ころまでの人生において注目すべき状況をいくつか挙げてきたが、それ以後の歩みからは、紙数の制約から、ただ一つ彼の開悟、あるいは別の言葉でいえば回心についてのみ考察して、他はすべて割愛せざるをえない。この回心は、すでに略伝のなかで紹介したように、いわゆる神靈感応者たちの首領ロックとの対決を前にして行なわれたのであるが、これを敬虔主義者たちの回心と比べてみると、その特徴がいっそう明らかになる。敬虔主義者の回心の最も典型的な例として知られるのは、フランケのそれである。二十四歳のフランケは、聖書解釈学の研究を通じて、つまり理性の立場から、信仰の不可欠性を知りながら、しかし自分自身の心のなかを覗いてみて、そこにあるのは神への疑惑ばかりで、信仰のかけらもないことを発見する。信仰が理性に妨げられて入りこめないのである。その無信仰ゆえの不安と絶望のあまり、自己を完全に空しくし、神のまえに身を投げだして、「この悲惨から救いたまえ」⁴⁸⁾と心情の叫びを発した瞬間、心の疑惑はいっさい吹きはらわれ、代って信仰が彼の心を見出し、彼は全身に「歓喜の奔流を浴びせられたかのごとく」⁴⁹⁾に、平安と慰藉を得たのである。一方、エーデルマンの回

心もまた不安のうちに準備されたと見ることができるといふのも、神靈感応者たちの首領ロックとの対決を二、三日後にひかえて、彼は対決の相手を宗教的いかさま師ではないかと疑ってはいたものの、なおかつ、「自分が相手にしているのが神なのか、それとも悪魔なのか、まだ確信がもてないで、生命にもかかわるのではないかと思われるほどの不安におちいった」⁴⁹⁾からである。この不安は、彼に味方する二人の友人にも共通するものであったが、彼はこの不安の原因を次のように分析している、「この不安の原因は(中略)、私たちが三人とも、私たちのすぐ近くにいる生きた神をいまだ知らずに、いつも神を私たちの外部に求めて、そしてもしもその神の使者に敵対することが、すなわちその神自身に敵対するということになった場合の、恐ろしい裁きを怖れなければならなかったからである。こういう考えはそれ自体では取るにたりないものではあっても、そのころ他に光明をもたなかった私たちが哀れな者たちを、ひどく疲労困憊させ、私たちは食べることも飲むことも忘れて、まったく情ない状態におちいった」⁵⁰⁾ このような「まことの地獄の不安」⁵¹⁾ゆえの疲労と衰弱のためエーデルマンは睡眠におちいり、そして、「不意に目がさめたその瞬間、ヨハネによる福音書のなかの『神ハろごすデアッタ』という言葉が私の心のなかにはっきりと聞こえてきたので、私はだれかがそう話しかけ、力をこめて『神は理性である』と言っているようにしか思われなかった」⁵²⁾そして彼は、それまでに何百回となくギリシャ語原典で読んだその言葉に、今初めて慰められ元気づけられて、そしてこの日は自分たちの誕生日にはかならないと考えるのである。

フランケの回心とエーデルマンの開悟は、その経過においてはたしかにある程度似かよっているが、しかしその方向と次元においてはまったく異っている。というのも、フランケの回心はあくまでも一個人の心情の範囲内における、まさに敬虔主義の神学が要求する「再生」であるのに対して、「神は理性である」というエーデルマンの開悟は、そのような心情の立場——そこに立つかぎり彼は、彼から見て迷信らしく思われるロックの予言を信じて、その神の裁きを恐れなければならない——を棄てて、物事を正しく批判する理性を思考と行動の基準として神格化するこ

とにほかならないからである。そういう理性が、あるいは別の言葉でいえば合理主義がある日突然エーデルマンを訪れて、彼が開悟したのではなくて、すでに青年時代から貧乏ゆえのさまざまな生活体験のうちに養なわれてきたことは、すでに見たとおりである。

さて、神靈感応者の一派を脱退して、今やあらゆる宗派から自由になったエーデルマンは、友人たちとともにあたりの山や谷を散歩して、「神を自然のなかに観察する」⁵³⁾ことに大きな慰藉を味わった。彼はこう書いている。

「私たちは最初は、それが最も善い最も有益な最も楽しい神の奉仕（＝礼拝）であることを知らなかったが、しかし、しばしばあらゆる感覚がいちどきにいと甘美に揺り動かされ、心がそれを取りかこむ厳かな静寂のなかで創造主を賛美するよう励まされるような快適な感情がわいてくることから、まもなくそれを知ったのである。

この、私たちから神に捧げるよりも、神から私たちにずっと多く示される奉仕において、私たちが味わった変化は数限りなかった」⁵³⁾

神は理性であると悟って、その神の理法を自然のなかに観察できるようになったエーデルマンの心の変化のうちに、汎神論的な世界観の萌芽を認めることは、それほど困難ではないであろう。

「神は理性である」という命題がキリスト教の根本教義にどの程度反するものか、キリスト教徒でない私には分らないが、エーデルマンはこの開悟によってキリスト教と断絶せざるをえなかった。正統信仰に対抗して、よりキリスト教徒にふさわしい信仰を見出そうとした敬虔主義、それより急進的な教会離脱主義、あるいはまた神靈感応者の信仰、これらをすべて完全に否定する彼の思想は、キリスト教会およびそれを支配機構の一翼とする当時のドイツの国家体制にとっては、最も危険な思想として受けとられざるをえなかったことは想像にかたくない。自叙伝以外には彼の『素顔のモーゼ』その他の著作を読む機会をまだ得ていない私には、その辺のことに詳しく言及する資格はない

が、しかしそのような反教會的・反体制的思想家エーデルマンになおかつ敬虔な——敬虔主義的でない——宗教性を認めざるをえないのが、彼の自叙伝に対する私の読後感である。

最後に付言したいことは、エーデルマンがこの自叙伝を書いた動機についてである。たしかに彼は自分を中傷する伝記に刺戟されて自己の思想の正当性を主張すべく筆をとったであろうが、しかしその伝記はあくまでも一つのきっかけになったにすぎないのではあるまいか。彼は自叙伝の冒頭にこう述べる。

「私は、私の理性を働かせつづけ、青春時代の放縱を克服したのは常に神に対する私の良心の証言にしたがって行動し、人びとがどんなに本気になって私の良心を否認しようとも、私のいっさいの行動を、顧みてみずから非難すべき一点もなきよう律することに努めてきたので、人間の事象の空しさを考慮するならば、後世ひとが私のこと、私のふるまいについて、何を言おうと言うまいと、それはどうでもいいことであろう。神をまえにして良心の慰めがあれば、また理性的な徳を愛する人びとが、私は私の生涯において人間社会の無用な一員として行動したのではない、ということ⁵⁴⁾を証言してくれるならば、私は（中略）、私の生涯をあらゆる喜びをもって終えるという満足を得るだろう」

この冒頭部分は、他の多くの自叙伝がそうであるように、本文をある程度書き進んだあと、たとえば第一部を書き終ったところで、初めて書かれたのではないかと想像されるが、ここに見られるエーデルマンの心境は、世の中傷に對する怒りとか、自己正当性の主張とかを超えた、わが人生に對する満足の予感とも言いうるものであろう。そしてそれは、「生涯の注目すべき状況」をあますところなく書き進んでいくうちに、おのずから心中に湧いてきたのではなからうか。たしかに彼の自叙伝は、社会の一員としての公けの弁明と自己正当性の主張を多く含んでいるが、しかし同時に、それとは直接関係のない、きわめて私的な体験、感想の告白をも行なっている。こうした告白のうちに、

彼は自分の本当の姿をあらためて発見したのであろう。それは貧乏に苦しんだ自分であり、また自然の美に感動した自分である。そういう自分を率直に語るといことは、それはたとえ詩形式をとらなくても、より大きな意味では詩的な営みではなからうか。すでに見たように、たしかに彼は、「私は詩人になることができなかった」と書いているが、しかし彼は人生告白するとき無意識のうちに詩人になっていたのだ。この詩人としての魂こそが、エーデルマンをしてこの長大な稀有の自叙伝を書かした真の動因である、と私は考えるのである。

(エーデルマンの自叙伝を敬虔主義的自叙伝の系譜のなかに位置づけるという、本稿の当初の意図については、この自叙伝が敬虔主義者の自叙伝の伝統のなかで、形式や論理のうえではいくつかの敬虔主義的要素を含みながら、その内容と精神においてはその伝統を超えて、大きく近代に接近したという結論が引きだせよう。もう一つの意図、つまりモーリッツの先駆者としてのエーデルマンの評価については、特に社会的・経済学的視線において共通性が認められるものの、なお全体的には、他日稿を改めて詳細に比較検討したい)

注

- 1) *Des berechtigten Johann Christian Edelmanns Leben und Schriften, dessen Geburt und Familie, welcher in Weisefels geboren und in Jena Theologiam studiret, solche aber verlassen; dargegen die Spöterey der christlichen Religion, der heiligen Schrift und der Geistlichkeit ergriffen.* Frankfurt 1750 in 8.
- 2) 著者はブレーメンおよびヴェルデンの地方総監督牧師 Johann Heinrich Patje (1710—1791)。
- 3) 著者は続編ではこのように訂正している。

エーデルマンの自叙伝―敬虔主義から啓蒙主義へ―(伊藤)

- (1) Johann Christian Edelmann *Selbstbiographie*, Faksimile-Neudruck der von C. R. W. Klose veranstalteten Ausgabe Berlin 1849; neu herausgegeben, kommentiert und mit einem Nachwort versehen von Bernd Neumann, Stuttgart-Bad Cannstatt 1976. S. 3.
- (2) ヌヅノムナク。
- (3) Joh. Chr. Edelmann's *Selbstbiographie*. Geschrieben 1752. Herausgegeben von Dr. Carl Rudolph Wilhelm Klose. Berlín. Verlag von Karl Wiegandt. 1849.
- (4) Edelmann *Selbstbiographie*, S. III-IV.
- (5) 社中秘録 〇ウウ。
- (6) Karl Philipp Moritz: *Anton Reiser. Ein psychologischer Roman*. 4 Bde. 1785-90.
- (7) Johann Franz Buddens (1667—1729).
- (8) Gottfried Arnold: *Unpartheiische Kirchen- und Ketzer-Historie, Vom Anfang des Neuen Testaments Bis auf das Jahr Christi 1688*. 1699 u. 1700.
- (9) Edelmann: *Unschuldige Wahrheiten*, 1735—43.
- (10) Nikolaus Ludwig Graf von Zinzendorf und Pottendorf (1700—1760).
- (11) Johann Friedrich Haug (?—1753).
- (12) Andreas Groß 生歿年不明。
- (13) Johann Friedrich Rock (1678—1749).
- (14) Edelmann: *Moses mit aufgedecktem Angesichte*.
- (15) Edelmann: *Abgenöthigtes, jedoch Andern nicht wieder aufgenöthigtes Glaubebekennntnis*.
- (16) Edelmann: *Evangelium St. Harenbergs*.
- (17) August Gottlieb Spangenberg (1704—1792) : *Lebenslauf unsers seligen Bruders August Gottlieb Spangenbergs, genannt Joseph, von ihm selbst aufgesetzt*, in: Archiv für die neueste Kirchengeschichte, ed. H. Ph. C. Henke, Bd. 2 (1795), S. 434 f. 續編 〇ウウ。
- (18) Edelmann *Selbstbiographie*, S. 39.

- 22) a. a. O., S. 90.
- 23) a. a. O., S. 123.
- 24) a. a. O., S. 124.
- 25) a. a. O., S. 128.
- 26) Goethes *Werke* Bd. 9, Hamburg 1955, S. 350.
- 27) Edelmann *Selbstbiographie*, S. 131.
- 28) a. a. O., S. 138.
- 29) a. a. O., S. 139.
- 30) a. a. O., S. 6.
- 31) Sig. Freud: *Eine Kindheits Erinnerung aus „Dichtung und Wahrheit“* in: *Gesammelte Werke*, 12. Bd. London 1947, S. 26.
- 32) Adam Bernd (1676—1748).
彼の人生については伊藤利男『アダム・ベルントの自叙伝——敬虔主義の心理学』(九州大学文学部紀要「文学研究」第七十六輯 昭和五十四年 99—134ページ)を参照のこと。
- 33) Edelmann *Selbstbiographie*, S. 7 f.
- 34) Friedrich Christoph Oetingers *Selbstbiographie Genealogie der realen Gedanken eines Gottesgelehrten*, hrsg. von J. Roesle. Metzingen 1961, S. 20.
- 34) Edelmann *Selbstbiographie*, S. 32.
- 35) a. a. O., S. 13.
- 36) a. a. O., S. 20.
- 37) a. a. O., S. 17.
- 38) a. a. O., S. 23 f.
- 39) a. a. O., S. 24.
- 40) a. a. O., S. 45.

エーデルマンの自叙伝——敬虔主義から啓蒙主義へ——(伊藤)

- 41) a. a. O., S. 46.
- 42) a. a. O., S. 49.
- 43) a. a. O., S. 55.
- 44) a. a. O., S. 62 f.
- 45) a. a. O., S. 63.
- 46) Barthold Heinrich Brookes: *Irdisches Vergnügen in Gott*, 1721.
- 47) Edelmann *Selbstbiographie*, S. 119 f.
- 48) August Hermann Francke: *Werke in Auswahl*, hrsg. von Erhard Reschke, Luther Verlag. 1969, S. 14.
- 49) フランケの回心については伊藤『アダム・ベルントの自叙伝』(注³²)参照のこと。
- 50) Edelmann *Selbstbiographie*, S. 272.
- 51) a. a. O., S. 272 f.
- 52) a. a. O., S. 273.
- 53) a. a. O., S. 274.
- 54) a. a. O., S. 300.
- 55) a. a. O., S. 1.